

明善同窓会 関東支部 会報

発行：明善同窓会関東支部
会報委員会
事務局：千代田区麹町 3-1-1
(株)昭栄広報内
電話：03-3265-4071
<http://www.jinryoku.com/>



ご挨拶 幅広い年代の期待に応える同窓会に

関東支部会長 昭和44年卒 瀬戸 渡



瀬戸渡支部会長様を始め明善同窓会関東支部の皆様には、日ごろから関東の各地にて本校並びに本校生徒を温かく見守っていただき、誠にありがとうございます。

ご挨拶

校長 長 俊一



学校におきましては、3年生が1月13日(土)14日(日)にセンター試験を受け、自己採点をして自らの得点に直面し、まさに高校生活3年間の総決算の時は今と、国公立大学の個別試験(2次試験)及び私立大学の試験に向けて、緊張感を持って挑もうとしているところです。生徒それぞれが温めてきた初志を貫徹し、結果として昨 year を上回る進路実績を上げてくれるものと期待し、職員一同全力を挙げて指導に当たっているところです。

学校の中核である2年生、「明善生」として逞しさを増す1年生も「文武両道」に励んでおり、俳句甲子園には福岡県代表として松山市で開催された全国大会に出場、化学部も研究成果が評価され、全国大会への出場を決めています。さらに、弓道部、水泳部、放送部、弁論部が九州大会出場を果たすなどの成長を見せています。

明善同窓会副会長で、株式会社ちくぎん地域経済研究所代表取締役社長をお務めの空閑 重信様、本校におきましても同窓の東京大学名誉教授正木春彦先生とともに第2期に入ったSSH事業の運営指導委員をお願いし、お世話になっておりますが、お務めの研究所の冊子で、「今年度は戊午です。戊午は過去に囚われず、地道な努力を重ねることが出来るか否かで成長するかどうかが決まる年と言われています。このため、過去の失敗にくよくよせず、明日に向かって邁進することを心掛けたいものです。」とおっしゃっています。

学校といたしましては、「過去の失敗にくよくよ」ということは全くございませんが、過去の成功にもとらわれることなく、明善が何者かということを変えないために変えるべきところを変えながら、改めて伝統を創造していきたい。決して奇をてらうことなく、明善だからできること、明善だからできる教育活動にこだわっていきたいです。

たいと思っています。平成31年度を迎える学校創立140周年の、まさに明善新時代の幕開けの年の前年である平成30年度は、エネルギーを蓄えながらチャレンジしていく「Charge & Challenge」の年にしたいと思っています。

なお、その平成30年度から柳川市にある伝習館高校と野球の定期戦を、毎年久留米市野球場を会場として実施することといたしました。明善が天明3(1783)年以来235年、伝習館が文政7(1824)年以来194年と、ともに創立が江戸時代の藩校に由来し、来年度にも新築校舎が完成します。長く、誇るべき歴史と伝統を有する両校が、平成30年度に新しい校舎をもって新たな歴史と伝統を築こうと、その第一歩を大きく踏み出す節目の年から始める、まさに「藩校対決明伝戦」を互いに記念すべき行事として、「北の小倉・東筑戦、南の明伝戦」と言われるよう、長く発展させていきたいと思っています。

最後になりましたが、関東支部のご発展と会員の皆様の益々のご健勝、ご活躍を祈念いたしますとともに、本校への変わらぬご支援をお願いいたしましてご挨拶いたします。

ご挨拶

同窓会会長 昭和41年卒 眞木大樹



明善同窓会関東支部の皆様には、いつもながら多大のご指導とご鞭撻をいただいておりますこと、心からお礼申し上げます。

平成の御代も30年という節目の年を迎えました。今上陛下におかせられましては体力的なこともあり、来年平成31年には皇太子殿下にご譲位される予定で話が進められています。戦後の新しい象徴天皇としての姿を模索され、国民と共に喜びも悲しみも歩んでこられたお姿を拝し、心からお礼を申し上げます。

さて、明善同窓会館(歴史資料館)も本年2月中には完成し、母校の校舎も行在所うらの図書館棟(食堂舎)で工事のほとんどが完了、次の世代への基礎が出来上がったものと思っています。来年平成31年には創立140周年(県立移行後)を迎える予定で、新しい時代の明善へと着々とことが進んでいるように思います。

昨年のこの会報にも記しました通り、平成20年に会長を拝命して10年、今年6月の代議員総会終了時をもちまして会長の職を辞したいと思っています。現在、同窓会の中より選出された選考委員会において選考を進めていただいているところであります。顧みますれば、平成20年、浅学非才ながら富安前会長の辞任の後、何も知らないうちに、会長職を仰せつけられ、半年もたたない内に福

岡県に新校舎建築のお願いの陳情に大雄信英校長(当時)と伺ったのが始まりでした。旧校舎の耐震問題もあり、県の対応は思いのほか迅速でありました。ロータリング方式工法ということで、旧校舎を崩してはたて、次々と建て替えるという方法で、期間は長くなりしましたが、やっと終着点が見えてきました。この間、第20代古賀俊一先生、21代石井利男先生、22代萩八州夫先生、23代高松亮輔先生、第24代長俊一現校長先生の6代の校長先生方に同窓会へのご協力やご指導を賜りましたことまことにありがとうございます。

またこの10年間、関東・東海・近畿・福岡の各支部の会長及び役員の皆さま、同窓会支部の役員各位のお陰で大過なく務めさせていただきました。この紙面をお借りして同窓各位への心からお礼を申し上げます。

結びに、明善同窓会関東支部の益々のご発展と各位のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げご挨拶とします。永い間ありがとうございます。

第51回明善大同窓会へのいざない

実行委員長 昭和58年卒 兵頭充紀

○日時 10月6日(土) 14時30分開会
○場所 ホテルニュープラザ☆いつもと会場が異なります！
○テーマ 「時は過ぎても続く友情」51回の新たな出発」

明善同窓生のみなさま、お久しぶりです。同じ校舎で学んだ、お目にかかったことのない先輩方、後輩の皆様、初めまして。昭和58年卒、53歳になった人生折返し地点の我々に、新たな出発のときが巡ってきました。

我々のスローガンは「時は過ぎても続く友情」51回の新たな出発」です。あんやつあどげんなつとつかしつとやしらんばい、じえんじえんおうとらんもん。昨夏、大同窓会へ向け、断ち切れていた絆を取り戻すべく学年同窓会をやりました。本当に不思議なものでね。長い人生のなかで、あつという間の3年間を一緒に過ごしただけに、顔を見ればあつ、すぐに思い出します。お偉くなったようでも、変わったようでも、あんまり変わっていません。卒業して35年、みんなそれぞれに山あり谷あり、良いこともときには悪いこともあつて、みんなそれぞれにいろいろな人生を歩んで来られているのでしょけれど。35年の時は過ぎても、一瞬にして時を超え、17歳のあの頃に戻つて、友情は続いていました。感傷に浸つて空を見上げていた間に、彩りのときを経て、久留米でも少しだけ雪が舞いました。東京では今年の雪は大変だったようですね。春が来て、夏になると、もうあつという間に大同窓会の季節です。グズでのろまでスタートの遅かった我々58会ですが、さすが明善同窓生、ここへ来てエンジン始動、もうじき全開となるはずですよ。関東支部の多くの明善同窓生が、久留米に帰ってきたくなるごたる、もしも帰つてこなかったら、損ばしたつて思われるごたる、そげな明善大同窓会の大成功へ向けて、我々58会、がんばらんで、ガアバ頑張ります。

是非、みなさま、久しぶぶりにちつこに帰つて来てみんね。筑紫一郎が、けしけし山がみなさまの帰りを待つとつ。10月6日土曜日、ホテルニュープラザにて、お目にかかりましょう。いつもとは違う会場になりましたので、お間違えないようにして下さい。

古希祝賀記念旅行「お伊勢参り、桜見物と国宝巡り」

よいかい副幹事長・旅行準備委員 昭和41年卒 龍頭正博

「次は10年後ばい!」。東京水天宮で交した約束が実現。久留米との3年に亘る検討と西鉄旅行の協力で「お伊勢参りの旅」を企画。2017年4月11日(火)13日(木)の2泊3日で、東京組36人久留米組45人総勢81人が参加の下、昭和41年卒「よいかい古希記念祝賀旅行」を実施した。

1日目、関東地区参加者は「のぞみ」、「しまかぜ」を乗継ぎ宇治山田で関西地区参加者と一緒に貸切バス乗車、東京組を編成。久留米組は京都駅で「のぞみ」を降り貸切バス乗車。各々のバスで合流場所の伊勢神宮外宮に向う。生憎の雨と渋滞で久留米組が遅れ、合流場所を急遽内宮に変更、東京組だけで外宮参拝。内宮で両者が無事合流。揃って宇治橋を渡り五十鈴川で心身を清め、神楽奉納。外玉垣南御門内に参内し特別参拝する頃には雨も止み、清々しい気持ちで古希に感謝。危うい滑り出しだったが以降最終日まで2台のバスで一緒に行動。初日は「鳥羽温泉郷戸田屋」に宿泊。2日目、澄渡る晴天の中、伊賀、甲賀を抜け「長谷寺」へ。399段の階段を上り、国宝の本堂に参拝。庭一面に咲き誇る満開の桜に感激。昼食を済ませ1時間半程走り「吉野山中千本」に到着。山間の道を思い思いのグループで散策。「二目千本」、山を埋め尽くす桜を脳裏に刻み今宵の宿「奈良ロイヤルホテル」へ。



旅のビッグイベント「古希の祝宴」は、途中参加(帰宅)を考慮して1日目、2日目各々の宿泊先の宴会場で開催。1日目は、32人の物故者に黙祷を捧げた後、別府秀喜氏の名司会の下、井上賢一氏の開会の辞、眞木大樹同窓会長の乾杯で開宴。参加各人毎に卒業時の顔写真をスクリーンに投写、51年を経た顔に昔の面影を重ね「〇〇君?〇〇さん?」思い出話が弾む。瞬く間に時が過ぎ、白組応援団長だった井上賢一氏の「白旗の歌巻頭言」に続く応援歌でお開き。2日目は、女性を代表し、稲見憲子さん、古賀啓子さんの挨拶、乾杯で開宴。老人ホームでボランティア活動をしている、竹越美砂子さん、森山智雄氏が古希の集に相応しい「認

知症予防講座」、「ハモニカ演奏」を披露。最後に校歌斉唱。「喜寿の祝いで又会おう、それまで元気で」と約束を交わし終宴。

最終日は国宝巡り。最初に「興福寺」で阿修羅像を始めとする天平の至宝を堪能。次の「東大寺」では、二度目の修学旅行とばかり大仏殿前で記念撮影。若草山で昼食、鹿と戯れた後、「唐招提寺」へ。千手観音や盧舎那仏が醸し出す曼荼羅世界に魅了され楽しかった旅が無事終了。バス駐車場で別れの挨拶を交し、久留米組は新大阪経由、東京組は京都経由で帰途に着いた。「次は7年後ばい!」。

69会の忘年会を終わって

昭和44年卒 水町和寛

今回は何回目の忘年会になるのか分かりませんが、小生が関東で同期会が開催されていることを知ったのが平成8年で、澤源太郎君からさそわれたのがきっかけでした。以来、地方勤務時を除き大体参加していますが、毎年、年初の会、旅行会、忘年会と盛大なもので、皆、明善出身であることを誇りにしています。

忘年会は、昨年12月2日にJR有楽町駅近のイタリアンレストランで開催されました。まず東京駅前の「E」内のクリスマスツリー前で集合とのことだったので、行ってみるとばかどかい真っ白に輝く一本のツリーがありました。周りは人混みでメンバーが見当たらないのでクリスマスツリーは別にあるのかと思い、ツリーの周りを一周したところで幹事の半田君の姿を見出し合流できました。その後、歩行者天国となつて、多くの人が行き交う丸の内通りのケヤキ、シナノキ等の街路樹に施された光輝くイルミネーションを見ながら会場のレストランに向かいました。

今回は、例年よりかなり少ない会でしたがそれでも13名の参加で、会場はレストラン2階のこぢんまりした人数的には程良い広さで、ワイン片手に久留米の話や今の仕事の話で盛り上がりました。女性陣は今も美しく輝きどちらかというかと男性が負けるほんです。徳山さんなど名古屋から毎回の参加で頭が下がります。男性陣は、まだ働いている者が多く、かく言う小生も昨年の8月から再々度働き始めたものです。というのは一昨年65歳で再就職先を退職し、悠々自適と思ってい



ましたが、大学や大学院の仲間もまだ働いており、薬剤師の家内からは家事をしつかりやれと叱咤される始末で、これでは働いていた方がまだましとネットで働き口を見つけたものです。一昨年から1年余りはテレビを見て過ごしましたが、コラーゲンやセサミン等のサプリメントのコーマーシャルが花盛りで何か早く老けるようで一層就業意欲をかき立てられたものです。働いてみれば家でじつとしているよりは体も軽くなった気がするこの頃です。人生100年時代といわれている昨今ですが、健康でありたいものです。

終わりに、忘年会の案内メールの返信で澤君が入院中で忘年会に参加できないという知らせを知り早期の回復を祈りし、69会(1969年卒業生の会)の近況報告とさせていただきます。

昭和45年卒2017年の締め括り

昭和45年卒 中島裕樹

11月1日表参道、ケヤキ並木は未だ青く往来も休日の如き混雑、この一角で絵画展の初日を迎えた。ギャラリーの窓から見下ろすケヤキ並木と往きかう人々、眺めていると頗る気分がいい。その為に個展を開いていると言ったら言い過ぎか。

表通りの人混みに比べ来訪者は少ない。それでもそれなりに対応しつつ、時刻同級生たちを迎えた。この日は同窓会を兼ねてのオープンングパーティ、と言うかそれを口実の飲み会、いつも馴染みの20名程が集まった。福岡からも原君が妻君を連れて来てくれて、まずはギャラリー会場で絵画鑑賞と雑談。皆気心も知れてホストとしても気を遣うこともない。勝手な批評もまた面白く、寧ろそういう遠慮のない率直な感想こそ聞いてみたいと思う。その後各自思い思いに店へ。

「パーティ」会場へは表に出ることなく移動できた。店がある地下3階まで歩いても数分(エレベーター使用けど)、歳のせいばかりではなく近いのは有り難い。会場となるのはドイツ料理とワインの店。この近辺での個展は4回目、それに合わせての集まり(飲み会)は何時も週末だった。が、今回は原君の上京に合わせて平日にしてくれた。お陰で店は貸切状態で落ち着いた雰囲気の中で楽しめた。美味しい料理と、ワインと会話と。事情に明るいシロカネーゼ鶴田君のセッティン



グで素敵な会場を設えて貰った。スケジュール、連絡と毎回幹事役の山口君にも感謝している。

向かいの席の彌永君曰く「こういう所は普段縁がなかけど君の個展があるとこげんしてみんな集まるったい、来年もやってくれんね」「確かに、俺もそう思う」でも来年ねえ、どうなるだろうか。

土曜だったか日曜か、客足が途絶え暇で、オーナーの高橋老人が話し相手をしてくれた。と入口で人の気配として話し声、オーナーは早速営業を開始、呼び込みに行つた。入つて来たのは口紅も色鮮やかな3人組、オーナーは色々話し掛け情報収集、どうやら高校生らしい。

《油彩画だけど「洋画」じゃなくて「日本画」あるいは「水墨画」これが今回の展覧会のコンセプト、落ち着いて静かな雰囲気画なのに「この画かわいい」「これ怖い」などと一頻り騒ぎそして帰って行つた。かわいい、怖い、語彙の多寡は問題ではない。何かを感じてくれた事を良しとしよう。明善を去る事早50年、当時自分達は何を見ていたのだろうか。あの屈託のなさが懐かしい。

6日最終日、表のケヤキ並木は一気に紅葉が進み落ち葉もちらほらと。人通りも少なく季節のない東京のこれが秋の風情か。

訃報CDの父 中島平太郎先輩

昭和8年卒の中島平太郎先輩が昨年12月9日、享年96歳にて死去されました。この訃報をキャッチしたのは、51年卒の内田さんが素早く支部幹事団へメールし、その一報を私が知ったからです。



中島先輩は生涯、音響に関する研究・開発・経営に携わり、特にコンパクトディスクCDを世に出し「CDの父」と呼ばれていました。明善卒業後、東京工業大学へ進学、NHK、SONY、アイワで音響に関わる仕事に従事されました。平成16年関東支部総会(実行委員長51年卒内田さん)にて「いい音、心地よい音を求めて」と題して、また県人会青年部でも、また母校の在校生や父母会、同窓会本部でも講演していただきました。

秋葉原のオーディオ店の社長達と話した時は、中島さんは私達業界にとっても、音響の神様!!のような雲の上の人です!と言われた事が昨日のように思い出されます。中島先輩を語る時に忘れてならない実績の足跡は、ふるさと久留米の石橋文化ホールをはじめ、全国の音楽ホールの多くの音響設計、また東京オリンピック競技場の音響システムを担当、そこに目をつけたSONYの当時の井深社長がNHKの放送科学基礎研究所長だった中島先輩をスカウトして世界初のCDを開発させ、SONYがそのオーディオプレイヤーを発売するに至った事だと思えます。中島先輩はその事で通産大臣特別賞が授与され、そんな素晴らしい実績を残された方が我等の母校の先輩だったのです。天寿を全うされた中島先輩を心からご冥福をお祈りしたいと思えます、合掌!

(昭和35年卒 高良季征)

関東地区同期会報告

昭和51年卒 高吉晋吾

明善高校を昭和51年に卒業した私たちは関東でも毎年1回の同期会を開催しています。これ以外に有志での集まり、特に女子会は活発に開かれているようです。昨年は、11月18日に32名が東京天王洲アイルにある第一ホテル東京シーフォートに集まり、同期会を開催しました。還暦を迎える節目の年でもあり、久留米や熊本等からの参加者も交えて楽しいひと時を過ごしました。名前が思い出せなくて困るとの意見が寄せられたことから、51会では初めてですが、還暦にちなんで赤いネームタグを準備しました。カードには名前と1年、2年、3年のクラスを書くことになりましたが、自分が何組だったか覚えておらず、ほかの人から教えてもらうことになった人もいました。また、還暦記念として、ささやかながら赤鉛筆に「祝還暦明善51会関東地区」を印字して配布しました。



会は、明善51会関東地区会長の内田君の乾杯に始まり、全員から恒例の近況報告、これも恒例の古瀬君による記念写真撮影、来年の企画として有志による検討が進められている「還暦記念伊勢参り修学旅行」の紹介など、1次会そして同じ場所での2次会と計4時間という時間があったという間に過ぎていきました。近況報告では、60歳を迎え、退職、再就職など仕事の変化に関する事、親や子供そして孫の話、ふるさとへの思いなど、みんなの話に、笑い声やうんうんと同感する声など、同期ならではのことで、自分自身のこのように聞いている人が多かったように思われます。また、10月に久留米で開かれた還暦同窓会での記念写真も回覧されました。懐かしい顔ぶれを見て、さらに思い出話に花が咲きました。

今回は今年11月17日の開催と決まり、また元気に再開することを約して散会しました。いつもながら、名残が尽きず、3次会、さらにその先へ行った人もいます。最後になりましたが、今回の会場となった東京シーフォート総支配人の昭和56年卒井上慎一さんに大変なご配慮をいただいたおかげで、ゆつくりと心

行くまで旧交を温めることができました。井上さんから感謝申し上げます。

大同窓会での校歌斉唱が楽しみ♪

昭和52年卒 雨森博子

年に2回は大勢で集まる52年卒。写真は、サラリーマンの聖地・新橋で開催された昨年末の忘年会。関東支部の同窓会や食事会に参加してくれていた親友への献杯からはじまった忘年会。さびしさを感じつつも、こうやって集まり、気兼ねなく話ができるのは幸せ。高校卒業以来の同級生にも会えて、明善のよさを実感していました。



私たち、見かけは若く見えますが(笑)、今年、還暦を迎えます。そんな関係で、忘年会の話題は「定年後、どこで、どんな仕事をするか?」と、「10月の久留米の大同窓会で校歌を歌うのが、とっても楽しみ」なこと。現役の際は、あるから歌っていた校歌ですが、大人になってわかる良さでしょうか。大同窓会には、関東組からも大勢参加して、一緒に歌おうと盛り上がりました。

帰り道、新橋駅前で「TV局の取材を受ける」というオマケもついた心に残る忘年会でした。

関東53会

昭和53年卒 井手靖

関東53会では不定期ながら年数回ゴルフを実施している。関東同窓会での幹事年度が終了した時点でゴルフ好きなおじさんを中心に、「ゴルフするバイ!」という事になり、八ヶ岳高原・清里高原での泊まってゴルフも含めた年数回のラウンドを初め、現在では紅一点の青木さんも加わって(もちろん青木さんは泊り無し!)の年4~5回程度のラウンドだろうか?初めて、清里高原泊まってゴルフの際は、初日ゴルフ、その後ログハウスを借りて十数名でのバーベキューを行い、どんな騒ぎをしたのかが、泊りだったせいか全員浮かれて飲みすぎ、翌日の露天風呂で富士山の絶景を見る事無くうな垂れながらお湯に浸かっている。毎回の

ゴルフの終了後、誰ともなく「次回のリベンジゴルフはいつするかね?」という発言があるが、はたして何にリベンジするためのラウンドなのか不明である。おそらく自分のスコアへのリベンジだとは思いますが、未だかつてリベンジが成功した同窓生は自分も含めていない!今後果てしないリベンジゴルフが継続する事を期待する。



関東53会が発足したのは、関東支部同窓会の幹事年あたり、その打ち合わせに集合したことにさかのぼる。無事役目を果たし打ち上げのパーティーの時に、誰からともなく「毎年集まったら良かよね」という声が上がったのだ。年2回の同窓会(冬の宴と夏の宴)は多い時には30名強、少ない時でも20名強は集まり、私たちは誰よりも絆の強い仲間だと自負している。筆者の勤務する会社でその話をするとき皆一様に驚かれます。特に九州・福岡の他校出身者から「東京でよう集まるね」と羨望の眼差しで見られることに、明善高校卒業生としての誇りを感じている。

定例の同窓会の他にも、その打ち合わせと称して集まることはもちろん、久留米在住の友人が上京してくる時には歓迎会も開く。53会の事務局を務めていて嬉しいのは、定例会はもちろんのこと急な誘いにも、あるいはお酒が飲めない女子も積極的に参加してくれることだ。こんなに仲が良い53会も、実は同じクラスになったことがない、あるいは同じクラスでもあまり話したことがないという同窓生が意外と多かったりする。そんな皆が昔からの親友のように楽しく語らいつづけている。明善高校卒であること53年卒であることを本心に良かったと皆がそう思っている。

最近の話題といえば、来年の還暦イベントの計画につきる。我々の修学旅行は(明善始まって以来の試みだと思うが)生徒が企画の中心となり、スキーツアーを実施したことだ。その修学旅行の再現をしようと計画している。志賀高原に行き、年齢のことを考えると無謀にスキーに挑戦せずに雪合戦を楽しみ、松本城や善光寺観光(本厄厄払い含む)を楽しむ予定だ。久留米や他地区の同窓生にも参加してもらえようと思いい企画を検討中。(当然、打合せも増えることと思われる。)実施後のレポートを楽しみにお待ちください。

初めての大同窓会

昭和61年卒 大島(永松)京子

2017年10月7日、ちょうど実家の用事で帰省していた私は、関東支部から参加する友人達に誘われて、急遽大同窓会の参加を決めた。いくら昔の友達に会えるとは言え、同窓会に参加するのはとても勇気がいる。特に初回は緊張する。しかも今回は大同窓会なので、当日会場に着いてまずその規模に圧倒された。前後を颯爽と歩いて行かれる大勢の先輩方を見ながら、さすが伝統校だと思った。会場は来賓の方や先輩方がいらっしゃるメインの第一会場の他に何室もあって、各会場に設置された大きなモニターで第一会場の様子をしながら同じ式次第で進んでいく。基本的には同じ学年の人達とテーブルを囲むので、どこかで見たような見なかつたような隣近所の人達と、お互いに名札を見せつつ自己紹介をしてポツポツと話しました。たまたま同じテーブルに高校一年の時のクラスメイトの男女が私の他に3人いたので、思い出話で盛り上がった。



二次会の会場では、東京在住で仲良くしている友達とも合流し、リラックスした雰囲気になった。三次会ではスナック(?)に行く頃には完全に緊張もとれて和気あいあいの雰囲気だった。この頃になると、だいぶ高校の時の記憶が戻ってきて、色んなことが芋づる式に思い出されてきた。周りでも具体的な思い出話が始まっていた。同じ行事を体験している、人によって覚えているところが全く違うのが面白い。自分の記憶だけでは一面的な事柄が、他の人の記憶で補われることで、より立体的ではっきりした形になる。話に夢中になってしまい翌日の日付が近くなった頃、実家の親からいつ帰って来るのと電話で急かされた時は、危うく自分の年を忘れて学生のような気分になってしまった。最後は30年ぶりに会った小学校からの同級生と一緒に四方山話をしながらタクシーで帰途に着いた。

初めての大同窓会は想像以上に楽しかった。旧交を温めつつ、更にまた新しい友達も出来た(はず!)。お世話役の皆様、誘って下さった皆様、ありがとうございました。

◆昭和46年卒特集◆

明善四六会報告

昭和46年卒 江端一博

平成29年度の46会は5月13日(土)川崎駅前の東芝未来館を見学後宴会と例年通りのパターンで開催した。久留米が生んだ発明家「からくり儀右衛門」こと田中久重の偉業を見学しようと決定したのだが、心の隅にひょっとしたら東芝未来館は閉鎖されるのではとの思いがあった。



ご存知の通り、田中製造所(のち芝浦製作所)の創業者で株式会社東芝の前身の一つなのだが世間を騒がせた東芝問題が頭にあったからだ。当日の参加者が20名を超えるため(22名参加)事前に連絡をしていたが、当日ウエルカムボードが準備されており先ず記念写真撮影。館内は有名なからくり人形の実演や、超電導実験、シャーペンシルの芯をフィラメントにした電灯の実験など皆、小学生たちに交じり、大昔に戻ったかのように熱心に見学していた。ここで2時間ほど見学した後、赤坂見附へ。赤坂東急プラザ内にある、昭和42年卒の高山先輩の店「赤坂有薫」へ移動し宴会へ。土曜日の為以外に余裕があったように先輩自ら対応して頂いた。当然メニューはきびなごの刺身、めざし、大川竹輪、自家製さつま揚げ、馬の赤身・タテガミなど「あっちもん」を堪能しながらにぎやかに過ごした。高山先輩有難うございました。またよろしく願います。

秋には例年通り1泊旅行で、今回は11月11日(土)・12日(日)の諏訪大社参拝と蓼科高原の散策。当日午前中雨の予報だったが誰か晴れ男(女)?がいるようで快晴だった。当日のキャンセルなどが数名有り、チョットさびしい10名の参加者が別の場所2か所で集合し、中央高速談合坂サービスエリアに向うもすぐに事故渋滞に巻き込まれ1時間以上のロスをしたが無事に合流。先ずは諏訪大社前宮(茅野市)へ拝殿近くまで細い道を上がった組と正面の鳥居前に駐車した組に分かれたが、拝殿近くへ行った組はもっと大きな社を想像しており相当行き過ぎてしまった。素直に鳥居から上がってくれば迷うこともなかったのに…。前宮から1キロほど離れたところにある諏訪大社上

社本宮は相当広く立派な神社で、七五三の時期でもあり家族連れも多くまた観光客も多く見られた。その後、信州へ来たならやはり蕎麦。本宮近くの蕎麦屋で遅い昼食をとる。更科系のそばに舌鼓を打った。次に向かったのは奥蓼科に有る御射鹿池(みしゃかいけ)。途中の山道は、褐色の落ち葉が踏まれて粉末になって道路わきに吹き積もっておりその分道路が狭く感じる、ヘアピンカーブ続きのヒヤヒヤ道路だった。やがてついた御射鹿池は、その物騒な名前と違い、こじんまりとした、なんとなく癒しの場と言う印象だった。(この池は、東山魁夷「緑響く」に描かれたと言われている。)それから今宵の宿「蓼科温泉ホテル親湯」へ。なぜか岩波書店の本があちこちに。緑・青・赤帯の岩波文庫の所蔵量は大型書店以上(白帯が無いのは癒されないから?)。創作フレンチ風の夕食の後、卓球と撞玉で温泉宿らしさを楽しみ、二次会が始まったのは10時頃欠席者が提供してくれた「ボンタン飴の酒」等を夜遅くまで楽しんだ。



翌朝蓼科高原は冷え込んで、朝早くからホテルマンが客の車の凍った前窓を拭いてくれていた。ゆつくり朝風呂に入った後、朝食をしっかりと取って、北八ヶ岳ロープウェイに乗って「横岳坪庭」へ向かう(40数年前には「ピラタス・ロープウェイ」と称していたが、紆余曲折があったようだ)。ロープウェイ山麓駅を出発するとすぐに、真っ青な空の下に南アルプス・中央アルプス・御岳・乗鞍・北アルプスと雄大な眺望が広がる。山頂駅から40分位、火山岩がゴツゴツした遊歩道を歩いて「坪庭」を散策した。標高は2200mを超えており、高山病予防に、休息と水分補給(最善の予防策は「行かないこと」だが、それを言っちゃあ…。)ゲレンデでは、すぐにやってくるシーズンにむけて、人工雪を降らせて根雪を張る準備をしていた。下山後横谷峡へ向かう。横谷峡はいくつかの滝が点在する峡谷で、入口にある駐車場に車を停め、落ち葉で滑りがちな細い散策路を歩いていく。すぐに「乙女滝」に着く。この滝はその名と違って、落差はそこそこだが水量は乙女チックではなく、傍にいとやがてずぶ濡れになるほど飛沫を浴びる。上流の王滝や屏風岩を覗ようとさらに歩き出したが、直ぐに遊歩道は通行止め、諦めて引き返す。「メルヘン街



道」「ヴィーナス街道」の名を冠した道路をくだり、途中「たてしな自由農場」という農産物直売所に寄って、対面にあった蕎麦屋で鴨せいろや稲荷寿司などの昼食を取り、直売所で、土産物やふつうに野菜などを買い込んで、全行程終えることとして帰路についた。帰路、判ってはいたもののやはり、中央自動車道は20km以上の渋滞で、またしても帰りは遅くなったが、例年よりは早かったかもしれない。いずれにしても事故もなく無事に旅行会を終えることができて何より。

「ふるさと」と「家」

昭和46年卒 本村龍史

父の33回忌と母の13回忌法要の為田舎へ帰った。花畑の実家跡地は区画整理事業が完了し、西鉄花畑駅は特急電車が止まる高架駅に変貌しており、全く新しい街になっていた。

母が亡くなったのは区画整理の為、自宅が重機で取り壊され始めた時だった。母の死の連絡で帰省してみると、周りはほとんど取り壊され、50年程前の、辺り一面野原と田んぼだった頃の様に空地ばかりになっていた。そんな中、重機によって壊されていく自宅を見ると自然と涙が出て来た。母はこの家を持つために頑張ってきた人で、地方公務員だった父の給料でつましい生活を送るとともに、自ら釣具店を営み自宅購入資金の返済をしてきた。当時の母は二、三年前の足の骨折が原因で入院を繰り返すうちに、痴呆症が進み、花畑の自宅すぐ近くの施設に入っていたので、自宅が取り壊されていることは解らなかつた筈なのに、この事がきっかけで執着していた家と共に逝ったような気がする。

思えば、46年前福岡県久留米市、筑後川という大きな川がある町から上京し、そのまま東京の新宿区、世田谷区と変えながら、生活の場として選んだ東京の府中市は故郷そっくりの街だった。田畑が残り、多摩川という大きな川が流れ、上場会社の大きな工場が有り、大学が有り、自衛隊の重要な施設が有り、人口もほぼ同じであった為あまり故郷を意識せずに過ごしてきた。父母が無くなり自宅も消滅した後は帰る場所を無くした事を思い知った。「ふるさと」は自分が育った家があつて始めて意味を持つ。「ただいま」と帰れるのは家があるからだ。「ただいま」と言いながら玄関を開ける時のやすらぎや安心感などの入り混じった何とも言えぬ充実感はどうも味わえない。子供の頃、遊び回った野原や田植えが済んだばかりの田んぼに入り、追いかけられたこと、基地と称して大木の股の部分に板を張り仲間と時間を費やした思い出、「ラムネん玉やパッチ」をして過ごした広場での想い出さえ失って

しまうような気がする。

中学生の頃から、母とは衝突ばかりしており、都会へのあこがれも手伝い、この家をどうやって出て行くかとばかり考えていた私は進学することで脱出に成功した。依頼46年間、年に一、二度の帰省で故郷との距離を保ちながら生活してきた。それも家と言う土台があつたからできたような気がする。久留米には想い出を共有する友人知人がたくさんいて、帰ればきつと暖かく迎えてくれるだろう。故郷はどんなことがあっても故郷だが、なぜか「ふるさと」とは違う気がする。育った建物が無くなる、しかし、せめて父母がいれば建物が新しくなったとしても「家」は残ったに違いない。今では「ふるさと」も「家」もなくしてしまつたようだ。

母校明善高校生時代を今思うに ——その時はどんな時代だった?

昭和46年卒 溝上澄生

つい最近娘から携帯に電話があつた。「今、家?久留米の明善高校とは、お父さんの高校だよね。TVで放送しているよ。早く〇チャンネルを観たら!」何だ!何だ?どうした!?チャンネルを合わせると、母校の映像が流れている。昼休みの終盤10数分間、各自の机に伏して眠るとのこと、これを「午睡」と言うらしい。TVでは、全校で、そして先生も実行しているとの内容であつた。前に聞いたような記憶もあるが、実際に映像で観ると、「ヘーッッ。これが、そーなんだ!」と。私が現役時代だったら、きつとイビキをかいて目が覚めず、周りに迷惑かけるだろうなあと思つたりして…。校長先生曰く、これが学習効果に好影響を与えていて、東大・京大・九大への進学者数も随分伸びているとのこと、現在の明善高の偏差値は私たちの時代とは違い、かなり高いらしい。福岡県下の進学校でもトップランクとのこと。正直悪い気持はしない。何はともあれ、現役生頑張れ!

振り返って46会の現役時代は、優秀な諸先輩方やその後の後輩の狭間にあって、全体として上記の超難関大学への合格者数はゼロまたは超少なく、正直低いレベルではなかつただろうか。(全くお呼びでなかつた私がこんなことを書いて、一部のそうでなかつた同期の皆さんには申し訳ない)だが、しかしだ。どうであれ一般的には定年退職年齢を過ぎ、昨年度からは国民年金の受給資格も得て、四捨五入すれば今年70歳の年齢となると、高い偏差値とは無縁であつたが、豊かで濃い明善高校生時代の様々な記憶が甦ってくる。

体育祭練習での上級生からの強烈なプレッシャー、仲間内での追試や赤点を免れた話、淡い片想いや告白話。音楽ではP.M.ブラザーズフォー・ボブディラン・

ビートルズ・サイモン&ガーファンクル、同時に日本のフォークシンガーの創成期をオンタイムで経験。ラジオやレコードを聴いて、カセットに録音して、楽譜買って、スリーフィンガー習って、アルペジオ織り交ぜてギター弾いて唄った。また、映画では、今でも評価の高い「俺たちに明日はない・2001年宇宙の旅・猿の惑星・卒業・白い恋人たち・ロミオとジュリエット・イージーライダー・明日に向かって撃て・くちづけ・ひまわり・真夜中のカーボーイ等」の名作やそれまでの概念を変えた映画のラッシュ。時には西鉄大牟田線に乗って福岡までも観に行くことも。文学界では、高校1年生時に川端康成がノーベル文学賞を受賞し、高校3年生の授業中に三島由紀夫の自決を知ることになった。アポロ11号の阿姆斯特朗船長他が月面着陸したのが高校2年生の7月。そして修学旅行には大阪万国博覧会の見学も含まれていた。その万博の目玉の一つが、そのアポロ11号が持ち帰った月の石。

今年で明善高卒業後48年、日本の大学紛争の真つ只、今思えば戦後23年から26年しか経っていない1968年から1971年の3年間、物事がいろいろ大きく変わろうとしていた丁度その時期に多感な高校生時代を送った者としては、母校明善高校での3年間は、人それぞれであろうが、私には偏差値頭を超越し、とても豊かで貴重な良き想いとして鮮明に生き続けている。

明善高校生のソウルフード

話は変わるが、明善高の心・食文化、ソウルフードと言えば、沖食堂のラーメン、チャンドンがある。チャンドンはもう食べる事が出来ない幻の肉なしチャンポン。加えてグリーンピース入りのおにぎりもあった。これも美味しかった。現在、福岡・博多ラーメンなら、「一蘭」や「一風堂」の都内店他、関東圏でも更には海外でも食えることができる。

「ばってん、明善生は沖食堂のあつさり系豚骨ラーメンで決まりやろが。気取らんとばい！そいも素ラーメンで替え玉つさい！」個人的には大成長期の中学時代から食べている沖食堂のラーメンスープが私のDNAに、これが豚骨ラーメンだとしてすっかり組み込まれている。久留米には大砲ラーメン・丸星ラーメン・大龍ラーメン・南京千両、その他、それぞれに多くのファンを持つ店がある。しかし「誰が何ちゅうたつてん、明善Ⅱ沖食堂で決まりやろもん。味だけじゃなかとばい！心、そう！その心よ。」

ここで、沖食堂関連情報を少し紹介したい。沖食堂の先代の大將(あんこ型力士の様に大きな太鼓腹のおっちゃん)と、ひろせ食堂(久留米市梅満町、金丸小学校西側県道209号線通り沿い)の小柄な先代大將は兄弟。ひろせ

食堂の先代大將が沖食堂から学んだとのこと。これは現大將に直接聞いた話。現在は両店とも次世代が切盛り中。ルーツが一緒だから、スープの味が良く似ている。ひろせ食堂の方が若干値段高く、大盛り気味。沖食堂は学生相手で、相変わらず安く、普通盛り。少し乱暴に言うくと、帰省時に沖食堂が閉まっけていても、沖食堂の味はひろせ食堂でも賞味できる。営業日と時間は各自確認を。

〈参考〉

ひろせ食堂…月曜と隔週日曜が休み。

営業時間は10時半～18時。

沖 食 堂…日曜と祝日が休み。

営業時間は10時～15時半で早く閉まる。

更にもう一つ、これはずっと後になって知ったことだが、皆さんはボクシング元世界王者の竹原慎二氏をご記憶だろうか。1995年に日本人世界初のWBA世界ミドル級王座(現同王座はロンドン五輪金メダリストのあの村田諒太選手が保有)に就いた長身のイケ面ボクサー。その後、TVの「ガチンコシリーズ」で不良をボクシングで更生させる番組に出演して有名。現在ステージ4のがんと闘っている不屈のファイター。その彼が所属していたのが「沖ボクシングジム」。ボクシングジム会長の沖徳一氏は久留米市出身で沖食堂の先代の弟さんだと現大將から聞いたことがある。そういえば確かに店内には竹原慎二選手のチャンピオン時代のポスターが貼ってあった。

沖食堂も、ひろせ食堂も、竹原慎二氏も、もつともつと生き続けてくれ！

明善のソウルフードの縁だ！ 心・魂の叫びだ！

「青き日々」

昭和46年卒 林内隆二

若き日の記憶は人生を分母とすれば時間的には少数分子であるにも拘わらず、極めて鮮烈である。それは記憶の印象は物量的長さによるものではなく、感性や感受性と言ったものに影響を受ける性質の故だろうと思われる。とにかく高校生活3年間の鮮烈さと言えば、あれから50年に近い時間が流れようとしているのに、さながら昨日のここのように思い起こされるのだから。我々46年卒生は1年3年が文化祭、2年が体育祭というローテにあたり、文化的な素養に乏しい身としては何と言っても体育祭での活躍を夢想したわけ、特に年功序列が発揮される体育祭における最高学年を経験できない運命は、何か損をしたような気になったものである。がしかし、我々の実際の3年間はそんな些末なことなど問題にならぬほど、文字通り激動の時期を体験することになったのだ。入学してようやく事

の道理が分かり始めた1年も終わり、2年の体育祭では3年生の主導のもと、生徒の手により自治的に計画・運用がなされ、流石だと思ったことである。プログラムは悪く消化され、今体育祭は終わりに差し掛かり、得点発表がなされ優勝ブロックの表彰と生徒の歓喜の嵐で幕を閉じるはずであったが、ここで思わぬことが起きる。最初から一貫して派手にパフォーマンスを繰り広げ、高得点での優勝を疑いようもなかった白組が、何と応援合戦で大なる減点を受け総合優勝を逃してしまったのであった。応援の制限時間が超過しての減点であった。この一瞬にかけてきた応援団としては何とも歯がゆい減点であった。更に減点制度についての事前周知が明確ではなかったこともあり、白組がすぐには結果に納得できないのも尤もなことではあった。生徒会執行部と白組応援団との交渉に、同情した他のブロック応援団も合流し交渉が難航している時、更にもう一つの問題が発覚、ブロック応援団のため、運動場には立体的な足場が組まれ生徒は止まり木の上に座る格好になるのだが、不思議なことにこの止まり木からは、4つのブロックの半分しか見渡せない。それぞれのブロックの止まり木がダイヤモンド形に組まれるからである。ところが本部席に交渉に行っていた応援団の生徒たちが或ることを発見する。来賓席からは見事に全ブロックが一望できるという事である。体育祭は来賓に見せることが目的なのか、生徒は不在ではないかという怒りが加わり、生徒不在の学校運営に対する鬱憤が増大し、閉会式どころではなくなった。生徒は運動場に座り込み大衆団交が始まった。何人かの職員が落ち着くよう説得するも火に油となった。来賓、保護者が退席した空間で生徒と職員の断交は日が暮れても終わりそうになかった。遂に学校側が翌日話し合いの場を設けるからという確約をするに至り、ようやく断交は治まりを迎えることになった。翌日からほぼ全校生徒が運動場に座り込み、学校当局との話し合いというよりは大衆団交が一週間続いた。生徒指導規則に関する不満が主だったが、中には試験をやさしくしろなどのどさくさの意見も混じって、日にちが経過するごとに座り込みの生徒数も減り、我々の「7日間戦争」はやがて終わりを告げた。

あの7日間は何だったのか、意義ある自治活動の芽生えだったという者もいた。単なる暴動の真似事だったと言う者も。武田鉄矢氏のおっかさんがあの場にいたら「このバカちんが!!」と叱られたかも知れない。あれが何だったのか、あの体育祭を経験した生徒に聞いてもおそらく一人一人捉え方は違っているだろうし、誰にも答えはわからない。ただ、一つ言えるのは

あの7日間闘争が仮に青春の氣にのぼせた麻疹のようなものだったにせよ、大人たちから見ればこの上もなく未熟な錯誤行為であったのせよ、あの時の我々には避けては通れない青春の門ではなかったかと。そして尻すばみに終わった7日間が翌年、今度は90周年記念行事をめぐって混迷のもう一つの7日間戦争として再燃するのであるが、それはまた別の機会の話としたい。

自分を、そして大切な人を守るために

昭和46年卒 中川修一

最近、思いがけない場所で災害が発生していますが、皆さんの周りでも同じようなことが起こっていないでしょうか。

「災害は、忘れた頃にやってくる。」という諺があります。これは、「普段から用意を怠るな。」という戒めでもあります。皆さんは、「自助」「共助」「公助」と言葉をご存知でしょうか。「自助」とは、「自分で自分を助ける。」ということです。平素から災害への備えをし、いざという時に自活できるようにしておくことです。できれば3日間は、「自助」できるように準備しましょう。

生命を維持するために必要不可欠なのは、「水」です。成人一人当たりの必要量は、2リットル/日といわれています。長期間保存できるタイプの水を所要量準備しましょう。また、自宅を離れて行動する時、「今、ここで災害に遭遇したら、どうすべきだろう。自分には、何ができるだろう。」ということを意識することが大切です。意識するだけで、周りの景色が変わって見えるかもしれません。

「共助」とは、「自分のできることをして協力、助け合うこと。」です。隣近所、町内会、各種サークル、ボランティア等がこれに該当します。同窓会のネットワークを活用した助け合いも「共助」に当たります。最近、都会では、この「共助」があまり機能しなくなっているようですが、これは平素のコミュニケーション不足が根底にあります。ご近所付き合いを活発にして、いざという時に「共助」が機能するようにしましょう。

「公助」とは、国や地方自治体による救援活動を指します。組織的な救援活動の実施には、3日から1週間の時間を必要とします。それまでの期間は「自助」「共助」で頑張ることが求められます。また、「公助」が優先される対象は、災害弱者である高齢者、子供、傷病者等です。幸いに怪我等をしなかった一般住民は、「公助」が開始されてもできるだけ「自助」あるいは「共助」で自活することが求められます。皆さん一人一人に平素から「災害」というものを意識してもらい、自分にとつての「自助」「共助」について考えていただきたいと思います。皆さんの災害への備えの一助となれば幸いです。

第31回関東支部総会報告

総会実行委員 平成元年卒 原 長亮

昨年5月の総会は、私たち平成元年卒で担当させていただきました。

昨今、伝統的取り組みの次世代への継承が課題と耳にすることも増えましたが、私たちも例外ではなく、なかなか同期が集まらない時期が続きました。瀬戸会長はじめ幹事会役員、前年の実行委員をされた昭和63年卒の先輩方につづつ教わりながら準備を進めていく中で、徐々に同期とも連絡が取れ始めました。それでも、集まった同期は私も含め総会参加経験のない面々ばかりで、総会が近づくにつれて不安は募る一方でした。そんな私たちが支えられたのは先輩方の心温まるご支援であり、また、久しぶりに同期と共に時間を過ごす喜びでした。先に述べました幹事会・昭和63年卒の先輩方のご支援は勿論、出欠連絡ハガキに書いていただいた高校時代の思い出の数々、数多くご提供いただいた協賛品など、その一つひとつに「明善卒業生で良かった」と感じました。一方、同期とは、高校卒業以来、初めて会うメンバーもいましたが、総会打合せと称した飲み会で会う度に、昔の思い出や近況を語り合って盛り上がり、打合せが二の次になってしまっていました。



そんなこんなでようやく本番にこぎつけた総会は、昨年5月21日に開催致しました。長校長、眞木同窓会長はじめ、多くのご来賓にご臨席を賜り、昭和28年卒から高校卒業直後の平成29年卒まで、143名の同窓生が一堂に会し、盛会のうちに執り行うことができました。残念ながら総会に参加できなかった方々もいらっしゃると思いますので、当日の様子を簡単に紹介致します。総会では、瀬戸会長の開会挨拶で始まり、長校長先生から近年の明善高校での取り組みや後輩たちの頑張りを紹介いただいた後、前年度決算はじめ全議案とも満場一致で承認されました。そして、皆さんお楽しみの懇親会：眞木会長からご挨拶をいただいた後、参加者最高齢で昭和28年卒の松隈先輩の発声による乾杯で始まりました。歓談の時間がスタートするや否や、会場のあちこちで、昔を懐かしむ声や近況を語り合う声、それらへの笑い声、仲間と肩を組み合って記念写真を撮るフラッシュなどで一気に賑やかな会となりました。私たち実行委員からは、

明善や久留米の今と昔をまとめたスライドショー、協賛品を賞品としたビンゴゲーム、久留米物産展を行いました。その他にも、大同窓会PRや久留米アンテナショップ紹介、参加大学生の紹介、そして恒例の校歌・応援歌の斉唱など、盛りだくさんの内容で、思い出に残る一日となりました。

今回、仕事にも子育てにもバタバタする年代での実行委員でしたが、今振り返ってみますと、この時期で良かったと思っています。一緒に取り組んだ同期の間は、同じような状況にあつて同じような苦勞をしつつ、一方でそれらを楽しく語り合える仲間で、こうしたタイミングで改めて集うことができて本当に良かったと感じています。「還暦の頃には伊勢神宮参拝にでも一緒に行こうね」という話も出ています。

最後になりましたが、総会準備・運営にご協力いただいた方々、紙面の都合でご紹介してお礼を申し上げますが、本当にありがとうございました。

第32回関東支部総会「甦る青春」に向けて

総会実行委員長 平成2年卒 寺崎隆行

第32回明善同窓会関東支部総会は平成2年卒業生が実行委員担当年度となります。私自身、前回の第31回総会が初めての参加で、本総会が毎年開催されていることすら知らなかった不埒ものが故、最初は何をどう進めていくのか全く分からない状況でしたが、諸先輩方のアドバイスをもとに、「甦る青春！」を第32回総会のテーマに掲げ、準備を進めています。

まずは同期集めから開始しており、卒業して27年が経っていますが、SNSの普及により割とスムーズの連絡は取れ、実行委員打ち合わせを不定期に開催することに。仕事に子育てに忙しい年代にも関わらず中々の集まりで皆に感謝。問題は総会の打ち合わせのほが、ただの飲み会になってしまいがちで打ち合わせにならないことでしょうか。でもそれが楽しく、髪の間と下腹部のメタボ感が反比例しているといった共通点も多く、会を重ねる度に結束力が強くなっていくのをひしひしと感じています。今現在(1月末)は案内状等の書類、当日の催しの企画を最終化しているところですが、催しの企画が一番難航しておりそろそろ最終化しなければと焦っているところです。その後はいよいよ5月の本番に向けて当日の実行委員係決め、会場側との詳細調整と



いった実行準備を整え、本番となる運びです。

テーマのとおり青春が甦る総会となるよう準備を進めてまいりますので、是非多くの方々にご参加頂きたく、実行委員一同で皆様のお越しをお待ち申し上げます。

最後になりますが、昨年7月に新橋にオープンしたアンテナショップ「福岡久留米館」による、郷土の品々の販売を予定していますので、是非ご利用頂ければと思っています。

第10回秋明交流戦を開催する

明球会関東支部 昭和51年卒 内田直人

明善高校と秋田高校の第10回野球部OB交流戦を11月25日(土)に東京大学野球場で開催した。明善2勝7敗の負け越しを挽回すべく明善球児OB20名、最年長は土肥先輩(S31卒)、また関東同窓会瀬戸会長、松平元会長はじめ多くの先輩方も応援に駆けつけてくれた。

先発投手は還暦年の友池(S51卒)、打線を誇る秋高に軟投で臨むも制球定まらず四球が続き2点与え、二番手の山崎投手(S53卒)が3年ぶりのリリーフ登板するも秋高の強力打線につかまり追加失点。明善打線は3回まで秋高の佐藤投手、針金投手の速球を打ちあぐね得点できず、3回までに8点差の苦戦。



一方、4回以降、明善も往年の打線が奮起。久光(S62卒)、若手の船津(H23卒)、立教大学4年高尾(H26卒)、助っ人東大野球部マネージャー黒田君の長短打の活躍で得点を重ね6対8の2点差まで詰め寄り一気に盛り上がった。3回以降、若手高尾投手がロングリリーフ力投で接戦模様となった。秋高も鋭い打球が復活し追加点、明善も秋高小玉投手の登板で再度気合が入り追加点を取るも、最後は力尽き9対12で惜敗。前半戦の失点が響く結果となり、今年では若手投手陣の参戦に期待したい。

延長戦は両校選手が入乱れた乱酒戦となり互角の飲みっぷり、最後は両校応援歌で締めくくり次回対戦を誓い合った。助っ人や審判として協力してくれた東大野球部のマネージャー諸氏も参加し、15年ぶりのリーグ戦での勝ち点獲得、最下位脱出、東大野球部活気の様子を語ってくれ、さらに明善球児の入部に期待すること。

関東支部ゴルフ大会

ゴルフ委員長 昭和43年卒 山下政晴

第16回ゴルフ大会は2017年4月20日(木)に「飯能くすの樹カントリークラブ」にて開催されました。今回初めての試みとして平日開催としたせいか、参加者はS33年卒からS47年卒まで熟年組を中心に15人と、いつもより少ない大会となった。女性3名。平均年齢は約69歳と高齢化が進んでおりますが皆さん元気溼溼、和気藹々といつもの如くプレイ、懇親会と賑やかな大会となりました。初参加は小野恵子さん(S41) 森下誠治さん(S47)。好天に恵まれ皆さんそこそここの？スコアでした。優勝は別府秀喜さん(41) ネット73。ブービーのネットは97。



第17回ゴルフコンペは雨、霧の為中止となりました。2017年10月21日に伊豆スカイラインカントリー倶楽部で開催予定でした。当日13名は東京駅からバスを往復チャーターし、総勢22名の参加でした。バス組も、自家用車組も現地まで行きましたが、雨やまず、又霧も晴れず、打ったボールが見えない状態で競技不可と判断し中止となりました。バス組は帰りのバスの中でいつもの如く宴会、又東京に帰ってきてからも鬱憤を晴らすごとく、東京駅で宴会と相成りました。

今回は4月21日(土)に開催予定です。30名くらいの参加者を期待していますので上手い、下手に関係なく気軽に参加して下さい。平均年齢を下げるべく若い同窓生の参加を切に希望します。平成卒の同窓生大歓迎です！第16回平成卒の参加者は2名のみでした。

編集後記

初めての試みとして「昭和46年卒特集」を仕立てた。実質的に65歳まで雇用延長が進みつつあり、昭和46年卒が実定年に近いはず、仕事に終わることなく余裕の出た年代だと思ったからだ。同期旅行会寄稿に始まり、ふるさとの家への思い、運動会がきっかけの「七日間戦争」、明善ソールフード「沖食堂」情報、元自衛官による災害時の心構え・自助、共助」など読み応えのある特集記事を寄せてくれた、是非一読あれ。来年は昭和47年卒特集で企画したい。総会幹事団も平成年代に入り、支部活動も若い年代に期待される同窓会を目指したいとの会長挨拶、新たな企画アイデアを是非お寄せ頂くことを期待する。古希、還暦の記念行事、大同窓会がきっかけで始まった同期会行事など楽しい活動を嬉しく感じた。明善新校舎、新同窓会館も完成間近とのこと、そして平成31年には明善創立140周年を迎え、同時に新元号へと、まさに新しい時代への飛躍の一年になればと願う。(NU)